2014年
(平成26年)
2月21日
日経産業新聞
11面
〈医療・シルバー〉

（すいぞう）を移植しない限り、インスリンを打ち続ける必要がある。免疫制御の技術を生かし、膵臓の移植をせずに根本的に治療できるようにする。

レグイミューンは糖尿病治療薬などの開発資金を確保するため、年内をメドに東証マザーズを視野に上場するための準備に入った。今年に入って監査法人などで公開準備企業を中心とした監査業務に携わってきた公認会計士の小須田建三氏を最高財務責任者（CFO）として招いたほか、監査役会を設置した。上場時の幹事会社は野村証券となる見込みだ。

レグイミューンは2006年3月に設立した。カリフォルニア州に現地法人を置き、米国で開発を進めている。

サーチライト

増える女性医師

仕事と家庭両立 問題に

首都圏では13年ぶりの大雪が話題になった2月8日から10日にかけて、第108回となる医師国家試験が行われた。

近年目立つのは女性医師の増加だ。1998年度には女性の医師は全体の14・1%程度だったのに対し107回の医師国家試験の合格者では32・1%を占めた。女性医師の多い産婦人科では、20歳代の医師の半数を女性が占めるほどだ。女性医師の増加に伴い、出産や育児への対応が問題となっている。

病院は救急や急変時への対応のために夜間の勤務が求められるほか、急に呼び出しがかかる可能性がある。しかも、女性医師は男性医師と結婚するケースが多く、夫婦間でのフォローもしづらい。まだまだ男性社会の医療界では、女性医師は一般の企業以上に、キャリアと家庭の両立が難しいと言われる。

結果として、女性医師が勤務医としてのキャリアを諦める例は少なくない。諦めた女性医師が健康診断や外来診療のみを行うアルバイト医師となる結果、医師不足にも拍車をかけているのだ。

「働きやすい病院」を認証するNPO「e-jnet」の滝野敏子代表理事は、子育てをしながら、救急を積極的に受け入れる大病院の勤務医として苦労した自身の経験から、2005年に「女性医師が働きやすい病院」を認証する制度を立ち上げた。

だが、忙しい病院で、子どもをかかえる女性医師の働きやすさをただ追求すれば、その分、泊まり仕事の回数が増えるなどのしわ寄せがきて、男性医師の不満が高まる。そのため、女性医師が働きやすい環境を作るためには、「男性医師も含めてワークライフバランスを追求できる環境を整備する必要がある」と滝野氏は話す。

もっとも、現在は根本的な解決策は提示されていない。長時間勤務する医師を給与で報いたり、外部に委託できる部分を委託したりすることで負担の軽減を目指す医療機関が多いようだ。

医師不足が言われる中、男性、女性の関係なく高いパフォーマンスが求められる医療機関が、子どもを持つ女性が働きやすい体制を作ることができれば、一般企業にとっても参考となるだろう。（山崎大作）

気管支拡張剤 携帯性を向上

大塚製薬、承認取得

大塚製薬は、小型化して携帯性を高めた吸入剤「メプチンスイングヘラー10マイクログラム吸入100回」の製造販売承認を取得したと発表した。ぜんそくや慢性閉塞性肺疾患（COPD）患者向けの気管支拡張剤で、吸入前に振る動作などを不要にし、ぜんそく発作時に容易に吸入できるようにした。薬価収載後、早期に発売する。

吸入器を改良、小さく、薄くして持ち運びやすくしたのに加え、小児や高齢者でも使いやすいよう、操作を簡素化した。「メプチン」は大塚製薬が自社開発したβ2刺激剤で、気管支ぜんそくやCOPD患者に用いられている。

医療ロボ開発 鳥取に拠点

テムザック

【鳥取】ロボットベンチャーのテムザック（福岡県宗像市）は鳥取県米子市に医療ロボットの研究開発拠点を開設した。鳥取大学医学部付属病院と共同で歩行支援ロボットなどの研究・開発に取り組む。

拠点は同市内のビルに設け、全額出資の研究開発子会社、テムザック技術研究所（同市）が運営する。当面は研究者5人程度で下半身に障害のある人向けの歩行支援ロボットなどの開発に当たる。今後、研究者は地元からも採用する計画。

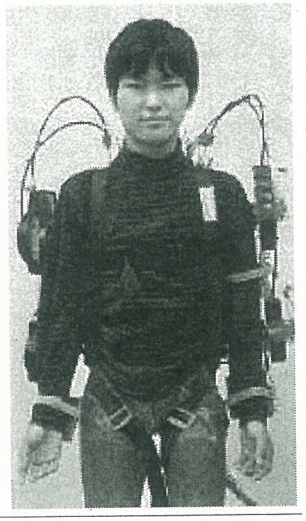
がん治療の後発薬

あすか製薬、2種発売

あすか製薬は20日、前立腺がんや閉経前乳がん患者の治療に使う後発医薬品「リュープロレリン」を2種類発売したと発表した。新薬は武田薬品工業が「リュープリン」として開発、既に特許が切れている。あすか製薬は武田の長期収載品を発売してきたが、後発薬の販売に切り替える。販売経路は武田が継続する。

発売したのは注射薬キットで有効成分の用量は1・88ミリグラムと3・75ミリグラムの2種類。昨年12月に薬価（薬の公定価格）が決まった。薬価が決まると同時に発売するのが製薬会社の通例だが、後発薬を発売する体制を整えるのに時間をかけた。

武田のリュープリンは特許は切れているが、生産技術が難しく後発薬がなく、ニプロが7年をやし開発を進めてきた。あすか製薬は今回、ニプロが生産する後発薬を売する。これに伴い、すか製薬は武田のリュプリンの販売を終えた。



の新拠点

地区に開設

創薬拠点はポートライナーの京コンピュータ前駅北側に設ける。運営事業者を募り、5千平方メートルの土地を無償で貸与する。拠点には大手製薬会社やバイオベンチャーの創薬研究グループが入ることを想定し、開発に使う最新設備を導入する。14年度予算案に土地の取得と企業誘致の体制づくりの費用を約9億1千万円計上した。

市はポートアイランドを「医療産業都市」と位置付け、医療・バイオ企業の誘致を進めている。現在、企業などに貸し出している研究施設の延べ床面積は3万平方メートルを超すが、すでに9割超が埋まっている。一段の企業誘致には施設の新設が急務となっていた。

iPS細胞を使った網膜再生施設「神戸アイセンター（仮称）」は先端医療センター病院の北側に設ける。基礎研究から臨床応用、リハビリまでを一体で手掛ける。細胞培養施設、臨床応用を実施する眼科病院、患者のリハビリ施設のすべての機能を持ち寄り、再生医療の実用化を促す。

億円、18年3月期に1兆円に引き上げるのを目指す。田中久雄社長は説明会で「1兆円規模にするには数千億円程度の買収も必要」と述べ、大型のM&A（合併・買収）に改めて意欲を示した。

と組んで2017～18度の実用化を目指す。

同大大学院理工学研科の藤井文武准教授の究グループが開発したスーツは人工筋肉装置背負い、肩や腕に沿っ金属製の補助アームを り付ける。アームの肘